若年性関節リウマチの臨床的研究

班　員　鹿児島大学小児科　寺　脇　保
研究協力者　信州大学小児科　赤　羽　太　郎
横浜市立大小児科　植　地　正　文
福岡大学小児科　小　田　禎　一
宮崎医大小児科　早　川　国　男
日本大学小児科　藤　川　敏
杏林大学小児科　渡　辺　言　夫

はじめに

本年度は第二次全国実態調査を行い，その実態と各研究協力者の下で詳細にみている所見との比較検討を行うことにした。

又，各二年目であるので各研究協力者は，自由に研究してもらった。

研究成果

1. 第二次全国実態調査（寺脇，鉾之原）

二次調査の目的は，詳細な病像の把握にあった。

(1) 調査方法

一次調査で得られた211施設に詳細なアンケート用紙を送り回答を頂いた。その結果101施設より解答が得られ，275名の患児のリストが集った。

(2) 結　果

1) 発病は1～6才に多かった。男女比は1対1.4であった。
2) 家族歴では，慢性関節のあるもの5.5%，リウマチ熱1.8%，全身性エリテマトーデス0.4%であった。
3) 既往歴で先行感染のあるもの14.9%，外傷2.5%であった。
4) 初発症状は発熱，関節痛が多かった。
5) 症状としては，関節症状のほかに，発熱，発疹，朝のこわばりなどの頻度が高かった。
6) 侵される関節としては，膝，足，手関節の順に多かった。

詳細はここでは略すが，回答をよせられたところの症例は，われわれ班員がみているものと大体同様のものであり，意外な症例はみあたらなかった。

2. 治療の検討（赤羽，小田，早川）

赤羽は，ステロイド依存性となった5例にD－ペニシラミンによる離脱或いは減量化が得られたことを報告した。D－ペニシラミンは発熱，関節痛などの急性症状に対して速効性は期待できなかったが比較的長期の使用により効果が発現するという。副作用として2例の低ガンマグロブリン血症をみた。

早川は，D－ペニシラミンを2例に使用し効果を得ていない。そして副作用として1例瘙痒感，1

例中毒症を認めた。

3. 免疫学的研究（藤川，寺脇，赤羽，渡辺，植地）

免疫学的研究が本年度は多かった。

(1) 藤川は，Rachelfsky が若年性関節リウマチ患児は HLA-B27 が多いという文献に刺激されて HLA と本症の関係を追及したが B27 との関係を認め得なかった。

(2) 寺脇らは，本症の好中球機能をみたが，遊走能に低上を認める例があった。好中球の溶連菌取り込み能に低下を認めたが，細胞内には異常なかった。また NBT 還元試験でも殺菌能に異常を認めなかった。

(3) 赤羽は，本症におけるT細胞の Suppressor 能の低下を認めた。

(4) 渡辺は，本症の細胞性免疫機能をみるために PPD，カンジダブロスエキスの皮内反応を検査し，これらの皮内反応が抑制されているものは，polycyclic の経過をとり，手こずる症例であろうと推論している。

(5) 植地らは，リンパ球の subpopulation をみたが正常であった。

何れの研究も途中経過報告であり，簡単に述べた。

むすび

研究者間の情報の交流も軌道にのったので来年度は最終年度でもあり，この班として本症の診断基準と治療基準をつくることに総力をあげたい。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

　本年度は第二次全国実態調査を行い，その実態と各研究協力者の下で詳細にみている所見との比較検討を行うことにした。

又，各二年目であるので各研究協力者ほ，自由に研究してもらった。